社　会

子どもの発達段階に即した社会認識の育成をめざす社会科学習

－　思考力・判断力・表現力を育てる学び合いのあり方　－

1　社会科で願う豊かな学びの姿

おととい，公園でサッカーをしていると，とつぜん黒い煙が上がっているのが見えました。消防車の音が聞こえてきて，その時，火事が起きていることに気づきました。急いで火事が起きているところに一番近いところまで走って行ったら，そこに家がとなりのおじさんが立っていました。なぜここに来たか聞いてみると，情報チャンネルで火事の情報を伝えていて，近くだったし心配で来たそうです。情報チャンネルはこうやっていかされているんだとわかりました。（小学５年　児童Ａ）

私は民権派の劇のセリフをつくってきたので，民権派の意見はもちろん，政府側の意見にもとても説得力がありました。国民にはまだ知識が足りないから，国会を開設しても世界のことに目を向けずに目先の損得で決めるという意見は，そうかも知れない…と思いました。しかし，それでも国民が政治に参加することで，政治への関心が高まるし，自分の国のことだからしっかり考える国民もたくさんいると思います。私は，民権派が主張するようなことがこれからの政治には必要だと思います。（中学２年　生徒Ａ）

上記の文章は，児童Ａは小学５年「知ろう　いかそう！身の回りの情報～集まる情報とそのいかし方～」の学習を終えたあとの日記に，生徒Ａは中学校２年「近代の日本と世界～欧米に追いつけ追いこせ～」の学習後のふりかえりに書いたものである。どちらの子どもも，学習したことを自分の生活に関連づけて考えていることがうかがえる。

学習前に児童Ａは，「自分は見たことがないから情報チャンネルはいらない」と言っていた。それが，ケーブルテレビの方に話をうかがい，わかったことを話し合うなかで，自分たちも市民の安全や生活を守ろうと協力してはたらく人々や，文字だから利用できる人々の存在に気づき，必要だと考えるようになっていった。また，学習後に書いた上記の日記からは，くらしのなかのできごとと学習した情報チャンネルのよさを結びつけ，その意味や意義について考えられるようになっているようすがわかる。

生徒Ａは，明治時代初めに生きた人々の立場に立って，政治への参加について考えていることがわかる。当時の国内の産業や教育などをふまえ，劇化を通して考えることにより，生徒Ａは自分の生活と関連させて考えることができている。ここでは，民権派の主張を歴史的事象としてとらえるのではなく，自分の生活している現実の社会の中で，主張を生かしていかなければならないという，社会の主体者としての意見が芽生えていることがわかる。

本学校園社会科部（以下社会科部と略す）では，児童Ａや生徒Ａに見られるような学びの姿をめざしているが，11年間の学びを通してまとめると以下のような豊かな学びの姿をめざしている。

○　積極的に追求を行うことを通して，知識を関連づけたり構造立てたりしながら社会的事象の意味や意義について，多面的・多角的に判断していく姿。

○　自分のくらしや生き方を社会的事象を通して考え，社会の主体者として社会に参画しようとする姿。

2　昨年度までの研究の経緯

(1) 子どもをとらえるという視点での取組からわかったこと

社会科部では，一昨年度より「豊かな学び」に迫るために，「中核となる視点」を見つけ「探究」する学びにつながる単元を構想することに重点を置いて取り組んだ。子どもをとらえる視点として，社会認識構造の発達モデルを基盤とし，「中核となる視点」をどうとらえ，その視点につなげるためにはどのような発問や単元の主題を設定すればよいかを中心として，単元構成研究を行ってきた。このことか

ら，子どもたちの習得した知識や概念がネットワーク化していくためには，「中核となる視点」を教師がどうとらえて単元構成をするかが重要であり，「中核となる視点」に知識や概念がつながっていくためには，単元の主題や発問が重要であることが見えてきた。

(2) 社会科における思考力・判断力・表現力

社会科における思考力・判断力・表現力はそれぞれ独立したものではなく，一体をなすものであると考えている。つまり思考力が育たなければ判断はできない。また思考力・判断力は表現されなくては活かされない。表現力がなければ，他者との学び合いは成り立たず，自分の思考・判断にとどまり多面的・多角的に考察し，社会的な見方や考え方ができるようにはなっていかない。このようにいずれか一つの力が育つということはありえないわけであって，切っても切り離せないものである。

習得した知識・概念が「中核となる視点」につながるためには，子どもの思考力・判断力・表現力を育成することが大切である。そこで，昨年度は，「知識・技能を『活用』して思考力・判断力・表現力を育てる学習活動」を設定し，実践することに重点を置いた。まず，社会科における思考力・判断力・表現力を，以下のように考え，３つの力は相互に深く関連しており，切り離せないものであると考えた。

○思考力……社会事象を多面的・多角的に考察する力，社会事象の意味・意義を解釈する力，事象の特色や事象間の関連をつかむ力。加えて，これらの力で得た知識・概念などをまとめる力。

○判断力……公正に判断する力，社会的な見方や考え方ができる力。

○表現力……思考・判断したことを他者に伝える力。

そして，この思考力・判断力・表現力をどのように高めていけばよいのかと考え，次の２つの仮説を立て，実践に取り組んだ。

仮説①　習得した知識・技能を「活用」する学習活動を，系統的・継続的に行うことによって，思考力・判断力・表現力が育つであろう。

仮説②　他者とのかかわり合いを大切にする学習活動を取り入れることによって，思考力・判断力・表現力が育つであろう。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に有効であったかかわり合い

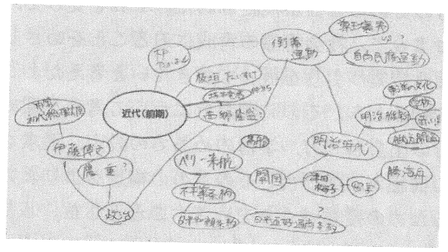
仮説②については，友だち，教師，社会の中の人たちとのかかわり合いを重視した，次に示した４つの学習活動を組み込んだ授業実践を行なった。

a　具体的な活動や体験の中から，問題を発見したり必要な情報を収集したりする活動。
b　他者とかかわり合いながら，発見した問題を整理し，共通の課題としてとらえる学習活動。
c　自分とは違った見方・考え方をもつ他者とのかかわり合いによって，これまでの見方・考え方をゆさぶる学習活動。
d　思考・判断したことを，根拠をもって自分の言葉で他者にわかりやすく伝えることにより，対話が成立する学習活動。

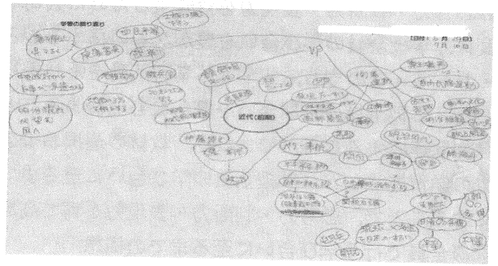
昨年度の中学２年生「近代の日本と世界～欧米に追いつけ追い越せ～」の実践から，仮説②の有効性について述べたい。この実践では，社会認識の深まりつつある単元の終末部において，劇「国会ができるまで」のシナリオを，「国会は時期尚早」と考える政府派と「すぐに国会を」と考える民権派のどちらかの立場に立って各グループに考えさせ，発表させた。同じ考えの生徒と劇のシナリオをつくる学習が，上記のｂ・ｄにあたり，それを発表し鑑賞し合う学習がｃ・ｄにあたると考えた。次ページに示した図Ａと図Ｂは，この単元の学習の前後に生徒が書いたイメージマップである。

単元の学習前は，語句が単発で他の語句と関連づけられていない状態であったが，学習後，この生徒は「明治維新」のところに「欧米を意識」を書き入れている。また，そこから関連づけて「四民平等」「廃藩置県」「徴兵令」「地租改正」といった近代化政策をまとめて書き入れ，さらに「欧米を意識」から関連づけて別のまとまりとして「アジアを支配下」「日清修好条規」「不平等条約」を書き入れている。生徒の中に「欧米の視点」「政府の視点」で知識をネットワーク化させながら習得した様子がうかがえた。また，冒頭の「社会科で願う豊かな学びの姿」にある生徒のふりかえりからも，自分とは違う他者の考えを知ることで自分の考えを錬磨し，思考を深めている様子がうかがえた。以上のことから，思考力・判断力・表現力の育成には，かかわり合いが有効な手立てであることはわかったが，学級内の生徒の認識の深まりにはばらつきがあると思われる。今後は，発表し合う学習にとどまらず，学級全体での学びがさらに深まるような工夫が重要だと考える。

図Ａ（単元学習前）



図Ｂ（単元学習後）



3　本年度の研究

(1) 思考力・判断力・表現力についての11年間のつながり

社会科が教科学習として始まる前の初等部前期から11年間のつながりとして下表のようにまとめ，整理した（思考力・判断力・表現力の詳細とその力の発達課題）。

	初等部前期	初等部後期	中　等　部
問題発見			社会が内包する問題を発見する。
		日本や世界・歴史的な事象から自分なりの問題意識をもつ。	
		身近な社会で起こる社会的な問題を発見する。	
	自分の身の回りのできごとを自分のこととしてとらえる（共感する）。		
	没頭して遊んだり，体験したりしたことからもっと知りたい・やってみたいと思う。		
調べる			社会事象の特色や相互の関連をつかむ。 社会事象の意味や意義を解釈する。
		適切な資料を選択し，読み取る（比較する，まとめる）。 （問題を解決するために）ある観点をもって，見学・調査したり，資料を読み取ったりする。	
	対象に積極的にはたらきかけ，自分とのかかわりに気づく。		
	五感をはたらかせてありのままにみて，何度でも納得いくまでやり続ける。		
発信する			調べたことを根拠にして議論する。 他者の調べたことに対して，意見を述べたり，考えを伝える。社会をよりよくつくりかえていく情報を発信したりする。
		自分で調べたことをもとに自分の考えをもつ。友達の意見などを比較し自分の意見を決める。それを相手にわかるように伝える。	
	自分の願い，思い，考えを確かにもち，それを伝える。		

上表をブロックごとに社会科における思考力・判断力・表現力をまとめていくと次のようになる。

○初等部前期……没頭して遊んだり体験したりしたことから，自分なりに考えたり工夫したりして，それを素直に表現する力。

○初等部後期……身近な社会で起こる社会的な問題を発見し，問題を解決するために，ある観点をもって，見学・調査したりして，自分の考えをもち，友達の意見などを比較し練り合って自

分の意見を決め，それを相手にわかるように伝える力。

○中　等　部……社会が内包する問題を発見し，社会事象の特色や相互の関連をつかんだり，意味や意義を解釈することにより，他者の調べたことに対して意見を述べたり，考えを伝えることができたり，社会をよりよくつくりかえていく情報を発信したり，行動したりする力。

(2) 思考力・判断力・表現力を育て高めるための授業づくり

昨年度までの研究から，先述したａ・ｂ・ｃ・ｄの４つのかかわり合いを重視した学習活動は，いずれも思考力・判断力・表現力を育成するために大切なものであることが検証された。それを受けて，今年度は，学級全員の学び合いを豊かなものにすることによって，社会認識の育成に迫ることをめざし，ａ・ｂ・ｃ・ｄのうち，ｃ・ｄの学習活動をより重視した授業づくりを行っていきたいと考えた。

ただ，学級全員の学び合いを豊かなものにすることを願うとき，その時間だけについて考察を深めるだけでは達成することができない。教材の選択およびその出会わせ方，学習のめあての設定，追求する上での学習方法など，学級全員の学び合いに至るまでの構想と，学び合いそのものの構想をよりよいものにすることで，思考力・判断力・表現力を育て高めるための授業づくりをめざすこととした。

①学級全員で行う学び合いに至るまでの構想

学級全員の学び合いに至るまでをよりよいものにするためには，その学習過程について，子どもの追求の流れを単元レベルで明確にすることである。具体的には，以下の２点を大切にしたいと考えている。

(i) 多様な学習課題を誘発するような教材の選択と興味関心が沸き立つような教材との出会いがあり，問題を発見・把握し，時間をかけて追求していくことができるような学習のめあてを設定する。

(ii) 学習のめあての解決をめざして，自ら選択した学習方法で調べ，その結果獲得した自分の考えをまわりの人にわかりやすく伝えられるようにする。

②学級全員で行う学び合いの構想

学級全員の学び合いを豊かなものにするためには，研究総論でも述べられているように，教師が行うはたらきかけが大切である。社会科部では，社会認識を深めていくために，次に示すようなはたらきかけを大切にして，授業づくりを行いたいと考えた。

(i) 掘り下げる

中学２年生歴史的分野「近代の日本と世界」の学習で，「日本はどのようにして独立をたもったのだろう」という学習課題に取り組んだ際，子どもが「薩長同盟を結ばせた坂本竜馬はすごい。」と発言した。この子どもの「すごい」ということばに込められた思いを「薩長同盟を結ばせたことがなぜすごいの？」と問い直し，掘り下げていくことによって，学級全員が「薩長同盟」の歴史的意義に気づくことにつながると考えられる。このように，考えに込められた思いを引き出していくことは，社会認識を深めていくために必要不可欠なものであると考える。

(ii) 提案する

小学５年「わたしたちと食料生産」の学習で，日本のこれからの食料生産について食料自給率に偏って考える子が多かった場合に，日本の耕地面積の変化の資料を提示し，水田の働きと関連づけながら環境の面からも考えることができるようにしたり，農業就業人口の変化の資料を提示することによって，就業人口に関わる課題に気づくことができるようにしたりすることが考えられる。固執した考えを揺り動かすような角度からの指摘をすることは，学級全員で行う学びを深めていくために重要である。

4　成果と課題

社会科における思考力・判断力・表現力を11年間のつながりから整理していくことで，発達段階に応じて高めていかなければならない力や切り離しては考えられない要素を明らかにしていくことができた。学級全員で行う学び合いに至るまでの問題発見・把握，めあての設定をどのようにするかについては，現在のところ見いだしつつある。「掘り下げる」「提案する」といった教師のはたらきかけを中心に授業は意識して進めることが大切であると考えている。具体については，事例を参照していただきたい。

（文責　原　　義昭）